

夢二式美人 Beauty in the Yumeji Style

夢二郷土美術館(岡山市) 2018.09.26~12.16



「竹下夢二」(1884~1934)は、岡山県邑久郡本庄村出身の「大正浪漫」を代表する画家で、日本画をはじめ、作詞、デザインなど多方面で活躍して、妻の「たまき」や「恋人の彦乃」、お葉らのイメージをもとに“理想の女性像”を数多く描き続けたことで名高い。

開催中の企画展「夢二式美人」では、画伯の特徴である“大きな目や手足、S字描く抒情的な構図といった特徴的な「美人画」”を数多く紹介・展示している。

《湖畔舞子図》 1926年(昭和初期)頃 紙本着色。

《立田姫》 1931年 紙本着色 二曲一隻 縦121.2 x 横97.6cm



当館コレクションを代表する、画伯自身が「自分の一生における総くくりの女だ。ミス・ニッポンだよ！」と語ったとされる理想の女性姿作品である。

「夢二」の美人画の特徴である大胆にデフォーム(対象を変形・歪曲)してS字のポーズを取り、鮮やかな赤い着物を着てこちらに背を向けた姿が特徴である。

「立田姫」とは、豊作を司る秋の女神で、中国の詩人「杜甫」の「歳晏行(さいあんこう)」の一部を引用したもので、詩が作品の右側に記載されている。

《秋のいこい》 1920年 紙本着色



鮮やかな黄色に紅葉したプラタナスに囲まれて、着物の女性はベンチで物思いにふけている様子で、手には青い洋傘を持ち、隣には大きな信玄袋(しんげんぶくろ)がある。

夢二が好んだ和の装いと洋を取り混ぜた作品で、大正時代の華やかさや美しさが表現されている作品である。しかし、モデルの女性は、素足に下駄を履いており、身につけているのは木綿縞の質素な着物で、田舎から上京したものの途方に暮れているようである。